

国境問題を解決するには ノルウェー、ロシアと40年交渉 「忍耐強く信頼構築」

志子田 徹

北海道新聞ロンドン支局

共同で石油・天然ガス開発へ

ロシアのプーチン大統領は四月末の安倍晋三首相との会談で、領土問題解決の具体例として、ノルウェーとの間で三年前、北極海とバレンツ海における係争海域で面積を二分して決着したことを紹介した。交渉は四〇年に渡ったが、「大国」ロシアを相手にして、「小国」ノルウェーはどうやって国境画定まで導いたのか。北方領土問題解決のヒントがあるかもしれないと思ひ五月中旬、ロシアとの国境にあるノルウェー北部の北極圏の町キルケネスを訪れた。

ノルウェー独特の地形フィヨルドに囲まれた、湖のように穏やかなキルケネス港。ロシア国旗を掲げた五隻のタラバガニ漁船以外には浮かんでい船もなく、日中でも静寂に包まれている。

「この小さな港が、いずれ世界の注目を浴びる

はずです」。ノルウェー大手海運会社系列の海運

調査会社社長ビヨルン・グンナソンさん（四五）

は目を輝かせながら、海の彼方を指さした。港から北東へ約五〇〇キロ、バレンツ海の海底では、二〇一〇年の国境画定を機に、ロシアとノルウェーが共同で、天然ガスの資源調査を本格化させている。北極圏は「地球上で未発見の天然資源の四分の一を埋蔵している」（米地質調査所）とも言われる資源の宝庫。国境が未確定だったため手付かずだった係争海域で、両国は今、資源開発を急ピッチで進める。開発が順調に進めばキルケネスは後方支援の拠点になるとみられており、すでに石油備蓄基地の構想が動き出している。

「まさに資源が眠っていたおかげで、ロシアは国境問題の決着へと歩み寄ってきたのではないかと」と、ノルウェーで著名なロシアウオッチャーのペール・エギル・ヘッケさん（七三）は指摘する。一九九〇年代以降、米国や欧州諸国、中国な

どが北極圏の資源に関心を強めており、最前線にあるロシアとノルウェーが対立していると、参入が相次ぎそれぞれの資源確保量が減りかねない。「ノルウェーは北海の油田開発で海底の資源開発に豊富な経験を持ち、ロシアにはない高い技術力を持っている。ロシアは国境問題を解決して、技術協力を得る上での障害を取り除こうとした」。ヘッケさんは、両国が一刻も早く「共同戦線」を張り、他国を排除する思惑で一致したと見る。

冷戦下で始めた国境交渉

ただ、解決に至るまでには、四〇年にわたる地道な交渉があった。一九世紀以来、海の国境は未確定のまま棚上げされていたが、一九六〇年代にノルウェー側で確定を求める声が出て、一九六七年に当時のソ連に国境交渉を打診。ソ連側が重い腰を上げた一九七〇年から、交渉は本格的にスタートした。とはいえ、当時は東西冷戦の真っ直中。旧ソ連にとつて、係争海域に近いムルマンスクなどは数少ない不凍港であり、潜水艦や艦隊の基地などが集中する軍事上の重要拠点だった。また、ノルウェーは北大西洋条約機構（NATO）に加盟して西側の最前線として旧ソ連を監視しており、互いの不信感の中で決着は不可能とみられていた。

こうした状況で、ノルウェー側はどのような交渉態度で臨んだのか。交渉に終盤からかかわった

ノルウェー外務省条約法務局のクリスチャン・ヤルベル局長は「漁業や資源などあらゆる分野の問題点を洗い出し、さまざまな解決の可能性を、双方が論じ尽くす方針で臨んだ。長い時間をかけて信頼関係を作り上げれば、両国が納得できる道が見つけられると思った」と打ち明けた。

また、交渉の相談役を務めたノルウェー極地研究科学アカデミーのピリー・オストレング理事長（七二）は「最も重要なことは、政治的、外交的に忍耐強いことだった」と振り返る。「急いで結論を出さず、あらゆる問題について粘り強く、徹底的に話し合った。互いの手の内が全て分かるまで話し合えば、信頼関係ができる。協力と信頼の態勢を作り上げることが不可欠だ」。漁業分野では係争海域の資源量を共同で管理し、魚種別に漁獲量を決めることで合意した。さらに、資源や環境問題についても両国で委員会を設けて話し合い、協力できる分野を積み上げていった。

住民同士が草の根交流

もう一つ、多くの専門家が指摘するのが、草の根の信頼関係だ。もともとノルウェーはロシアと良好な関係の時代が長く、「ロシアと唯一、戦争をしたことのない国」と自慢する国民も多い。両国の北部では、中世から海上交易が盛んだったし、第二次世界大戦でキルケネスはナチスドイツに占領されたが、ソ連軍が解放した。ただ、ソ連当局



ロシアの少年団をノルウェー側に招いて開かれたサッカー交流試合。試合後はお互いをたたえ合った（志子田徹撮影）

による漁船の拿捕などトラブルも発生し、国境が未確定な中でぎくしゃくすることもあった。

しかし冷戦後の一九九三年、キルケネスでは民間の交流団体「バレンツ事務局」が発足し、両国の地域住民の交流事業に取り組み始めた。今では年間二〇〇以上のスポーツ・文化イベントを行っており、同事務局のモルテン・ブルーゴールさん（二九）は「政治が決着するのを待っていてもダメ。国籍は違っても、近くに住んでいる住民同士が草の根交流を続けることが、問題の解決につながる」と胸を張った。

ちょうど滞在中の五月一七日はノルウェーが国を挙げて祝う「憲法記念日」で、国境から約四〇キロ離れたロシアの町ニケルから少年サッカーチームを招いて、キルケネスの少年団との交流試合が行われた。試合後は抱き合ったり握手して互いの健闘をたたえあい、キルケネス少年団コーチのトウ・サンドさん（四五）は「この子たちが大きくなつてからも、仲の良い隣人同士だよ」と笑顔で話した。粘り強い交渉と草の根交流の末、二〇一〇年四月、オスロを訪れたロシアのメドベージェフ大統領はノルウェーのストルテンベルグ首相と会談後の記者会見で突然、国境問題で基本合意に達したことを明らかにした。日本の領土の半分近い約一七万五千平方キロの面積を、ほぼ二等分した合意内容だった。

ただ、経過は一切公表されず極秘で進められたため、両国民には寝耳に水だった。画定によって主張より面積が減少したが、ノルウェー国民から不満はほとんど出なかったという。オストレング氏は「国民が感情的にならなかつたのは、ナシヨナリズムをおおる政治家がいなかつたし、国境が決まって安心を得られたことが大きかつたから」と分析した。

ロシアからの買い物客急増

国境問題の決着後、キルケネスは北歐随一の「ロシアタウン」と言われる。市街地から国境検問所



ノルウェーとロシアの国境検問所。ロシア側から日帰りの買い物客の乗用車がひっきりなしに訪れる（志子田徹撮影）

までの道は拡幅工事が行われており、往來が増えていることが分かった。途中、対向車はロシアナンバーばかりだ。

検問所といっても、黄色が鮮やかな北欧住宅のようにかわいらしい。「あのポールの向こうがロシアですよ」。ノルウェー国境検問所のヨールン・ステンセン次長が五〇メートルほど先を指さした先には、電柱より細いポールが見える。その脇を、ロシアから来た車が次々と通り抜け、検問所にはすぐに一〇台ほどの車列ができた。

入国審査は、パスポートとビザを見せればすぐ

に終わる。二〇〇キロ近く離れたロシア・ムルマンスクから来たアンジェリーナ・コーチュグラさん（二二）に聞くと「友だちと旅行に来たのよ」と楽しそうに話した。国境から三〇キロ圏内の住民ならビザも不要になった。往來者数は加速しており、二〇一〇年は一四万人だったが、ビザなしが昨年六月から始まったこともあり、二〇一二年は二五万二千人まで急増した。

検問所の利用者は圧倒的にロシア側が多く、八割を占める。大半の人の目的はノルウェーでの買い物だという。ロシア人の購入額は町全体の小売販売額の四分の一を占め、どの店もロシア語のできる店員を置く。「ロシア人大歓迎。経済発展のため、どんどん来てほしいね」とは、キルケネス観光案内所のグンナル・アンダション所長。

結婚などで移住も増え、人口約三三〇〇人のうち一割はロシア人だ。道路標識にはノルウェー語とロシア語が併記されている。スーパーマーケットの駐車場もロシアナンバーばかりで、ムルマンスクから来たレナ・グレゴリアさん（三八）は「おむつやコーヒー、化粧品の商品質がとても良いのよ」と強調していた。反対にノルウェー住民は、安いガソリンや食料を求めてロシアに行く人が多い。

北方領土問題への教訓は

ノルウェーとロシアの国境確定は、双方にメリットが多かったと言えそうだ。北方領土問題の

参考になることはあるだろうか。

ノルウェー外交問題研究所のインドラ・オーペラン研究員は「戦争がきっかけになった北方領土問題とは歴史的背景が異なるが、ノルウェーとロシアの国境問題も原子力潜水艦の基地が横たわっており、軍事的に難しい問題を抱えていた」と主張。その上で「ノルウェーとロシアの場合は、双方ともある程度妥協して決着につなげた。しかし、日本の外交は従来の立場に固執し、妥協は難しくうに見える」と話し、硬直的な交渉姿勢が課題だと指摘した。

四月の日ロ首脳会談は、ようやく北方領土問題の解決へ交渉を「再スタート」させることを確認させたにすぎない。「四島一括」を貫くにしろ、あるいは「二島+α」に方針転換するにしろ、決着への道のりは、はるか遠いように見える。戦後まもなく七〇年にもなるが、日本の外交はソ連、ロシア相手に柔軟性を欠き、結局、北方領土問題はほとんど解決に近づいていないのが実情ではないか。

「信頼関係なくして国境問題の解決はあり得ない。ノルウェーは石を一つ一つ積み上げるように実績を積み重ね、その上で国境線をどこにするかの議論につなげていった。こうしたやり方を検証すれば、北方領土問題を少しでも前に進めることに役立つはず」。オストレング氏の指摘は傾聴に値する。

へしこた とおる